

あ い さ つ

京都大学東南アジア研究センター所長（代理） 堀 江 保 蔵

岩村所長が外遊中のため、総務主任である私が一言御挨拶致します。

本日から、農林省、OTCA、東南アジア研究センターの共同主催によりましてこうしたシンポジウムが開かれることは、御同慶に堪えないところです。古くから水の問題は、政治の問題、経済の問題、あるいは広く文化の問題として扱われ、歴史の流れとともに現在に至っております。よく水を制する者はよく民を治め、天下を握るといわれ、水資源の有効利用が文化の発達に大きな影響を与えることは、エジプト、バビロニア、中国などの例をあげるまでもありません。

東南アジア研究センターは昭和38年に発足し、この4月から京都大学の附属施設として官制化して、本年が5ヶ年計画の3年目に当たります。ここでは、人文、社会、自然にわたる総合研究を行なうという使命をもっており、地質、土壌、動物相、植物相、あるいは疾病、医療の分野における研究と並んで、水資源の調査、研究はもっとも重要な研究題目の一つであります。今回のようなシンポジウムが開かれますことは、当センターの研究を一層拡充、進捗させていく上にも非常に有意義なことであり、感謝しているところであります。

農林省ならびに OTCA の調査、研究につきましてはよくは存じませんが、多少とも直接の政策的な内容かと思います。これに対して、東南アジア研究センターの場合はあくまで調査、研究自体が目的であります。しかし、その成果が結果においてはアジア諸国の経済開発に寄与貢献することをひそかに期待しており、その意味におきまして、農林省および OTCA の意向と期するところは合致するものと信じます。このような立前から、直接の目的は異なりましても、ここに三者の協力のもとに開かれるシンポジウムは過去の研究の再検討によい機会を与えとともに、さらに将来、他の同様の機関との協力を緊密にする出発点ともなると考えます。

本日は折悪しく天候不順の日にあたったわけですが、多数の皆様の御参加を得られましたことは感謝にたえません。参加各位に厚く御礼申し上げますとともに、成功裡にこのシンポジウムが終らんことを祈ります。